

当院の職員図書室

神戸市立医療センター西市民病院 院長 山本 満雄

今回「病院図書館」巻頭言の執筆依頼を受け、改めて神戸市立医療センター西市民病院の職員図書室について考えてみました。当院は1995年の阪神・淡路大震災において倒壊し、病院機能は休止のやむなきに至りました。市民の皆さま方、地域医療に携わるさまざまな方のご支援の結果、ようやく2000年5月に地下2階、地上11階の新病院に再建されました。当院は病床数358床（ICU5床、救急11床、身体合併4床を含む）を有し、医師数はほぼ100名の神戸市西部地域の総合病院です。

職員図書室は、震災以前は事務局のそばに設置されていましたが、再建後は主なユーザーである医師や看護師がより利用しやすいように医局や看護部に近い場所に設置されました。

職員図書室の利用対象者は病院全職員と地域医療関係者です。主な蔵書は医学書で、そのほかにわずかですが一般参考書や一般図書もあります。臨床研修指定病院・がん診療連携拠点病院・地域医療支援病院として利用者のニーズに合わせた図書室になるよう図書の充実とサービスの提供を図っています。所蔵図書は約7,600冊、国内雑誌492タイトル、海外雑誌90タイトルです。また、インターネット環境として、インターネットを利用できるパソコンを数台配置し、契約中の電子ジャーナルや医学中央雑誌Web版、UpToDate、メディカルオンラインなどが随時閲覧可能です。職員図書室は72.0m²で、病院の規模としてはやや手狭ですが、24時間閲覧

利用可能です。利用している職種では、医師（特に初期研修医・専攻医）が4割、看護師が4割でそのほか薬剤師、管理栄養士、臨床工学士などです。日勤帯で平均17名/日ぐらいの利用があります。

私の場合過去に図書室に行った記憶は、大学病院にいた頃です。大学卒業後そのまま外科の大学院に進みました。博士課程で論文執筆中に文献検索のために通った思い出があります。図書室の静かな雰囲気が好きでした。最近には図書室を利用する機会は少なくなり、読書に関しては、主に警察ものの推理小説、佐々木譲、今野敏、横山秀夫などの作品を愛読しています。

話は変わりますが、2011年の3月11日14時46分東北三陸沖を震源地とするマグニチュード9.0の大地震が発生しました。神戸でも非常に長い時間横揺れを感じました。神戸市より仙台市への支援活動の一環として西市民病院より3班に分かれ、3月19日より4月7日まで医療支援活動を行いました。私は、第3班として私を含め医師2名、看護師2名、臨床検査技師1名の計5名のチームで3月31日より4月7日まで仙台市の若林区に入りました。仙台市立七郷小学校の保健室を活動の拠点として常駐させてもらいました。小学校の体育館も避難所となっており、約100名の方が避難されていました。そのほか若林体育館に300人ぐらいおられ、私の行った時期には他の避難所より若林体育館に避難者が集約されつつありました。私たちはこの2カ所を中心に、そのほか3カ所の避難所の巡回診療にあたりました。

4月6日に、常駐している七郷小学校に河北新報社の論説委員である佐藤陽二さんが避難所の視察と支援者のインタビューに来られました。佐藤さんは河北新報夕刊1面のコラム「河北抄」を毎日執筆されている方で、私の話したことと名前を翌日のコラムに掲載していただきました。そして震災の前日より約7カ月間の「河北抄」を1冊の本にまとめられました。約130本のコラムと震災関連の写真が掲載されています。主

に佐藤さんが被災地をまわり実際に見聞きしたことを「希望」という言葉を意識しながら綴られた内容で、非常に強い感銘を受けました。河北新報社論説委員会編『3・11を超えて—夕刊コラムのみた東日本大震災』は、秋田市の無明舎出版より2011年11月に発行されています。私の所にも送っていただきましたが、震災直後の人々の心情に心打たれる作品となっています。興味のある方は、ぜひ一読してください。